ニュースアイ2000
記者メモから

「なぜ死を選んだか」対立する両親と学校

新座の中学生自殺

新座市立二中二年の大貫陵平君（当時十三歳）が九月三十日、同市内の自宅マンションから飛び降り自殺した問題で、両親と学校側との対立が深まっている。死の前日、大貫君は学校で菓子を食べたことについて教諭から事情を聞かれ、反省文を書くよう指示された。「指導に行き過ぎがあった」とする両親に対し、学校側は「指導ではなく事実確認。行き過ぎがあったとは考えていない」と反論。その後の話し合いで、両親が申し入れた指導方法の改善などを巡っても、双方の主張は平行線をたどったままだ。

■「ごめんなさい」

大貫君は九月二十九日の昼休み、校舎のベランダで友人からもらった菓子を食べた。放課後、菓子を食べた二十一人の生徒が会議室に集められ、十二人の教諭が話を聞いた。大貫君は、反省文を書くように言われて帰宅した。

翌日午後九時十分ごろ、担任の教諭から自宅に電話があった。担任から大貫君が菓子を食べたことなどを知らされた母親の政江さん(43)が事実を確認したところ、大貫君は反省した様子で「ごめんなさい」と言ったという。

大貫君が飛び降り自殺したのは、その約一時間二十分後だった。部屋には「死にます。ごめんなさい。なくさんバカなことして、もうたえきれません。バカなやつだよ。自爆だよ」などと書かれた遺書が残されていた。

▲自殺した大貫君が通学していた新座市立二中

■指導法を巡って

大貫君の自殺の原因解明を求めてきた父親の隆志さん(43)は、「学校での教諭の一挙手一投足はすべて指導」としたうえで、「目の前に十二人もの教諭がいれば、生徒にとっては威圧、強制に近い。反省文を書かせても屈辱感を感じさせるだけのこと」と訴えている。

これに対し、同校の阿部哲生校長(52)は「前日の事実確認と自殺との間に、直接的な因果関係があったかどうか判断するのは困難」としている。

これまでに隆志さんら両親は、①多数の教師による威圧的な指導②反省文を書かせること③ほかの生徒の行動を密告させるような指導――について、やめるよう同校に申し入れた。

学校側は、今月一日から二十日間の学校公開を実施し、教職員が「生徒理解推進委員会」を作るなど、生徒指導体制の見直しを図ってはいるが、「威圧的、脅迫的な態度で、ほかの生徒の名前を挙げることを強要したわけではない」などとして、両親の言い分を全面的に受け入れてはいない。

「反省文に屈辱感」×「指導でなく事実確認」

■残された"宿題"

先月二十二日、大貫君の死をきっかけに、同校に子どもを通わせている親たちが作った「生命の応援団」（小松とし子代表）の初会合が新座市内で開かれた。隆志さんら両親も参加した会合で政江さんがあいさつに立った。

「陵平の遺書にある『自爆』という表現は、時代や社会への何らかのメッセージではないか。それを考えるのが、私たち親の宿題だと思う」

「二度とこうした悲劇を繰り返してはならない」という点で、両親と学校側との思いは同じだ。しかし、繰り返さないために必要な、大貫君が死を選んだ理由について、両者が納得できる答えは、いつ出るのだろうか。